

地域と世界を往還するパートナーシップ —「梅染め・組紐プロジェクト」にみる学生の協働のプロセス—

Reciprocal Partnerships Between the Local and the Global:
Student Collaboration Processes in the “Umezome and Kumihimo Project”

小関一也¹

Kazuya Oseki¹

¹ 常磐大学総合政策学部 / Faculty of Management and Administration, Tokiwa University

Abstract

This study examines how reciprocal partnerships between the local and the global are generated and developed through the “Umezome and Kumihimo Project,” a practice-based educational initiative linking a Japanese university, local cultural communities, and silk producers on Negros Island in the Philippines. Using qualitative data collected between 2022 and 2025—including practice records, student reflections, interviews, field notes, and citizen surveys—the study analyzes student collaboration processes that connected local cultural learning with international co-creation and community engagement.

The project is characterized by a back-and-forth structure in which students first learned traditional cultural techniques in their local context, such as umezome (traditional Japanese plum dyeing) and kumihimo braiding, and then applied this knowledge in overseas collaborative production. Through shared material practices, dialogue, and joint experimentation with local producers, collaboration emerged as a reciprocal process of mutual learning rather than a unidirectional transfer of skills. Insights gained through international collaboration were subsequently brought back to the local community through exhibitions, public events, and dialogue with citizens, forming a continuing cycle of practice and reflection.

The analysis identifies three interconnected dimensions of student collaboration processes: the generation of collaboration through contingent encounters, the deepening of partnerships through students’ mediating roles among diverse stakeholders, and the expansion of collaboration as cultural practices functioned as shared media across contexts. By situating these processes within the frameworks of SDG 17, Global Citizenship Education, and discussions on internationalization in higher education, this study demonstrates how student-led collaboration can foster glocal learning that links local practice with global engagement.

キーワード：往還的学習，学生の協働，パートナーシップ，文化の媒介性，グローカル教育

Keywords: reciprocal learning, student collaboration, partnership, cultural mediation, glocal education

1. はじめに

1.1 問題意識

現代は「分断の時代」と呼ばれ、世界各地で紛争や対立が深刻化している。ガザ地区やウクライナでの武力衝突は言うまでもなく、多くの国で「自国ファースト」の言説が広がり、外国人や移民への排他主義の傾向が強まっている。こうした状況は、相互理解や協働が容易には成り立たない現実を際立たせている。他者とのつながりが損なわれやすい今日、異なる文化や社会に生きる人たちがどのように関係をつくり直し、新たな共同の営みを築いていくのかは、国家レベルのみならず、私たち一人ひとりが向き合うべき課題である。

一方、2015年には、すべての国連加盟国が賛同し、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: 以下SDGs）」が採択された。その起草案“Transforming our world”の題名が示すように、SDGsは世界の本質的変容をめざす「行動計画（a plan of action）」である。¹その中心理念である「誰一人取り残さない（No one will be left behind）」は、弱い立場に置かれている人々への配慮を示しているだけでなく、地域で積み重ねられる小さな連携が社会変容の端緒になるという考え方を含んでいる。

こうした考え方は、UNESCOが2012年に提唱した「地球市民教育（Global Citizenship Education）」とも深く呼応する。地球市民教育は、多文化理解、相互依存の認識、市民的責任といった資質を育み、地域での具体的な行動が地球規模課題の解決へとつながることを重視する教育モデルである。SDGsと地球市民教育の視座を重ね合わ

大学地域連携学研究 5 : 17-29, 2026

連絡先：小関一也

水戸市見和 1-430-1 常磐大学総合政策学部

oseki@tokiwa.ac.jp

受理：2026年1月28日

せるならば、この分断の時代に、市民が地域で行う小さな実践こそ、国境を越えた協働の学びの出発点として浮かび上がる。

1.2 研究の目的と方法

本研究で取り上げる「梅染め・組紐プロジェクト」は、SDGs と地球市民教育の理念を、市民レベルで具体化した取り組みである。常磐大学の学生が水戸の地域文化である梅染めや組紐を学び、その文化的価値を携えてフィリピン・ネグロス島を訪れ、現地の生産者とフェアトレード商品を共同開発してきた。この学生主体の国際協働は、小規模ながら地域と世界をつなぐ確かな関係を生み出してきた。この点において、本プロジェクトは「地域からはじまる世界との協働」の具体的事例として位置づけられる。

本研究では、本プロジェクトの協働の特質を明らかにするために、次の三つの観点から考察を進める。第一に、大学生が地域文化の実践を通して多様な地域の主体とつながり合い、地域内で多様なパートナーシップを形成していった点。第二に、大学生が文化的媒体として地域と海外の双方で協働に加わり、文化の“共創者”となっていった点。第三に、この往還型の学びが、「グローバルな視野」と「地域での実践力」を育む「グローバル教育」に寄与しうる点である。

また本研究では、2022年度から2025年度にかけての実践記録、参加学生の卒業論文、報告書、現地での聞き取りメモ、市民アンケートなど、多角的な質的データを収集した。²その分析にあたっては、「協働の生成」「協働の深化」「協働の拡張」という三つの段階を設定し、協働がどのように立ち上がり、深まり、地域と世界へ広がっていったのかを質的に検討していく。

以下第2章では、本研究の特質を理解するために、SDGs・地球市民教育および国際協働学習、地域連携に関する先行研究を整理し、本プロジェクトを読み解くための理論的枠組みを提示する。

2. 先行研究と理論的枠組

2.1 SDGs と地球市民教育の理念

SDGs は、世界が直面する複合的課題に対し、国家・自治体・市民・企業など多様な主体が協働して持続可能な未来を築くための指針である。とりわけSDG17「パートナーシップ」は、国境を越えた「グローバル・パートナーシップ」の重要性を強調しており、地球規模の課題は国内だけでは解決しきれないことを明確に示している。³こうした理念は、多様な主体が国境を越えてつながり合

い共に未来を構想する営みこそが、持続可能な社会の基盤となることを浮き彫りにしている。

UNESCO (2015) が提唱する地球市民教育は、学習者に「地域・国家・世界という多層的レベルで責任ある行動を取ることを求めている。そこでは、相互依存の理解や多文化への開かれた姿勢を重視し、日常の経験を起点に地球規模の課題へと視野を広げる学びが描かれている。このように、複数のレベルを往還する学びのあり方は、地域と世界をつなぐ学びの実践と高い親和性を持つ。

さらにLim (2024) は、高等教育の国際化とSDGs の関係に光を当て、SDGs が大学に新たな国際化の規範をもたらしていると論じている。従来の国際化が市場化・競争化に偏ってきたことから、Lim は国際化を「社会的責任」や「持続可能性」へと再定位する必要があると説く。また、SDGs を大学の地位向上の手段として利用する「地位獲得型の国際化 (positionalism)」を批判し、地球規模の課題に協働で取り組む「公共善に根ざす国際主義 (internationalism)」への転換を促している。

以上の議論から、SDGs が提唱する「グローバル・パートナーシップ」の理念、地球市民教育が描く「ローカルとグローバルを往還する学び」、そしてLim が提示する「公共性に支えられた国際化」の方向性は、いずれも地域の学びと国際協働を結ぶための有効な理論的枠組となる。本研究では、これらの論点を手がかりとして、梅染め・組紐という地域文化を媒介に地域と海外コミュニティが結び合う営みを、“往還的な国際協働学習”として位置づけ分析を試みる。

2.2 国際協働学習の成立要件

本研究では、国際協働学習を、異なる文化的・社会的背景を持つ主体同士が、共通の実践や課題に取り組むなかで相互に働きかけ、その関わりの中で学びを深めていく過程として定義づける。このような研究領域としては、「国際サービス・ラーニング (International Service-Learning : 以下 ISL)」が、海外のコミュニティとの協働を通して学びを深める多様な実践を展開してきた。本研究は ISL を直接の分析視軸とはしていないが、そこでの議論は国際協働学習の成立要件を考える上で示唆に富んでいる。以下四つの概念に注目し整理してみたい。

第一に、「協働性 (collaboration)」である。Chan ら (2021) は、ISL の学習の中心要素として「現地住民との協働」を挙げている。Chan によれば、国際的な学びは、学生が一方向的に活動を行うのではなく、ホストコミュニティと対等な関係で目的を共有し、共同で実践を構築していく協働性に支えられている。

第二に、「互恵性 (reciprocity)」である。Gregory ら (2021) は、「援助する／される」という従来の非対称的な構図を問い直し、相互に影響を及ぼしながら学び合う関係への転換を提起している。村田 (2017) も、互恵性の核心を、学生とホストが関係性を通して共に変化していくプロセスそのものに見出そうとする。

第三に、「ホスト起点 (host-driven)」である。O'Sullivan & Smaller (2023) は、ISL の取り組みが大学側の目的に偏って設計されてきた点を問題として指摘し、プログラムの起点を送り手側に置くのではなく「ホストコミュニティの声や文化的文脈」に置くべきだと主張している。

第四に、「多主体性 (multi-stakeholder participation)」である。藤山・大山 (2024) は、「SOFAR モデル (Students, Organizations, Faculty, Administrators, Residents)」を用いて、学生・教員・大学組織・受入団体・地域住民など、多様な主体が関係を結びながら活動が展開していくプロセスを描き出す。⁴

以上のように、「協働性」は学生と現地住民との関係性の基盤を、「互恵性」は学び合いの質を、「ホスト起点」は協働を立ち上げる際の出発点を、「多主体性」は協働が広がるプロセスを読み解く上で、重要な観点となる。これら四つの観点を用いて、本プロジェクトにおける国際協働の特徴を検討していく。その枠組みを図1に示した。参照されたい。

2.3 地域連携研究からの視座

地域との協働を理解するには、それがどのように立ち上がり、どう関係が形づくられ、さらにはどのように広がっていくのかを見通す視点が求められる。地域連携研究では、こうした理解にアプローチするための視座として、以下の三つの概念が論じられてきた。

第一に、「偶発性 (contingency)」である。地域との協働は制度的な計画だけでなく、現場で生まれる予期せぬ出会いや対話を契機として動き始めることがある。倉田 (2018)、清水 (2016)、佐藤 (2014) は、学生が地域に身を置き人々との交流を重ねる経験が、活動の広がりや関係性の変化につながる可能性を示唆している。張本 (2025) も、偶然の出会いや出来事が協働の端緒となり得る点に着目し、協働が生まれる予期しない出会いに光を当てる。

第二に、「媒介機能 (mediating function)」である。金子 (2016) は、大学が地域の多様な主体をつなぐ媒介 (ハブ) として働く意義を指摘する。兒玉・隅野 (2018) は、コーディネーターが大学と地域の間で価値観や期待を調整し、関係形成を支える役割を担っていると論じている。

こうした点を踏まえると、協働は偶発的な出会いだけでなく、関係を継続させる働きによっても支えられていることが分かる。本研究では、現場に入る大学生が、対話や行動を通して、どのように多様な主体をつなぐ役割を果たしていたのかを検討する。

第三に、「文化の媒介性 (cultural mediation)」である。UNESCO (2019) は、文化が異なる社会をつなぎ合わせる媒介資源として働くことを示した。Sakamoto (2017) も、文化が対話や相互理解を促す媒体となる点に注目する。地域文化は、人々をつなぎ、新たな協働を可能にする社会的資源である。本研究の梅染め・組紐もまた、学生、地域住民、海外生産者を結びつける文化的媒体として、地域と世界の間で協働の場を開いてきたのである。

これら三つの視座は、地域における協働が、偶発的な出会いを契機として立ち上がり、媒介的な働きによって支えられ、文化という資源を介して広がっていくプロセスを理解するために有効である。これらの視座を踏まえつつ、本研究では、梅染め・組紐プロジェクトにおいて、大学生が地域と世界でどのように関係を築き、共創的な協働を形成していったのかを明らかにしていく。

3. 梅染め・組紐プロジェクトの展開

3.1 プロジェクトの全体像

3.1.1 プロジェクトの特徴

本プロジェクトは、水戸の梅染めとフィリピン・ネグロス島の自然染めを組紐の技法で結び合わせ、両地域の文化資源を融合した新しいフェアトレード商品を共同開発する取り組みとして、2022年度に始動した。学生が地域で梅染め・組紐の技法を学び、その学びを携えて現地生産者と共同制作に臨み、成果を地域に還元するという往還型の学びを展開している。

この往還的構造は、地域文化が異文化の生産環境や素材と出会うことで新たな価値が生まれる点に特色があり、地域文化教育・国際教育・地域連携を統合する学修モデルとして位置づけられる。

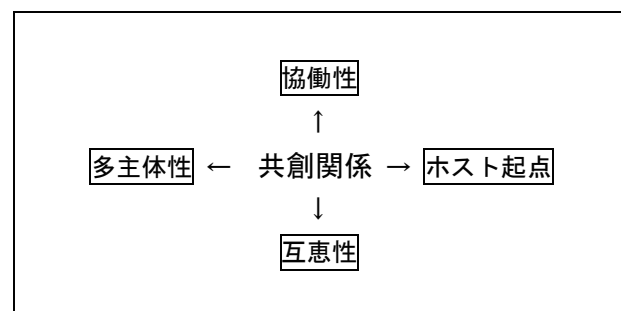


図1 国際協働学習の成立要件

3.1.2 成立と発展の経緯

本プロジェクトの端緒は、著者が地域の研究会を通じて茨城 OISCA の小野瀬康武氏と出会い、ネグロス島での支援活動に同行したことにある。現地の OISCA バゴ・トレーニングセンターは長年、ネグロス島で生産者支援に取り組む団体であり、著者は 2015 年のネグロス訪問を機にバゴ市との交流を深めた。2016 年には常磐大学とバゴシティ大学の間で、教育と研究に関する連携協定が締結され、翌 2017 年には常磐大学フィリピン研修がスタートした。⁵ 参加学生は、午前中に英語を学び、午後は現地のニーズに合わせた SDGs 活動を実践してきた。⁶

この SDGs 活動の一環として、学生によるフェアトレード活動が始まる。当初は、OISCA で絹製品の生産現場を見学し、生産者の手づくり商品を購入して帰国後に市民イベントなどで展示販売していた。しかしやがて、現地の生産者から「日本でも手に取ってもらえる商品と一緒に開発したい」という要望が寄せられ、学生が品質改善や商品開発に関わるようになる。このような経緯を経て、2022 年度には本研究で取り上げる「梅染め・組紐プロジェクト」が発足することになった。

3.1.3 参加者構成

本プロジェクトには、筆者のゼミ生（各学年から数名）を中心に、フィリピン海外研修の参加者や学生ボランティアサークル「フェアリーテイル」のメンバーが加わり、全体では約 30 名の学生が直接・間接に関わっている。

地域では、水戸ユネスコ協会の林和男前会長（梅染め）や大学 OB で組紐職人の鈴木康夫氏（組紐）から技術指導を受け、「木もれ陽」（作業場の提供）、常磐大学同窓会（物品支援）をはじめ、文化デザイナー学院や市内の高等学校・中等教育学校（展示会の共同開催）、共同ワークショップに参加した地域住民など、多様な主体が協力者となり、緩やかなネットワークを形成している。⁷

3.1.4 主な活動

本プロジェクトの主な活動は、次の四点に整理できる。

- (1) 地域文化の学習：地域の専門家から梅染めや組紐の技法を学び、年 7～8 回のワークショップを通して文化理解と技能の修得に取り組む。
- (2) 市民イベントへの出展：「水戸まちなかフェスティバル（水戸市）」「世界の GOHAN（笠間市）」「ガヤガヤ☆カミスガ（那珂市）」などに参加し、展示・販売や市民との対話を通して活動の意義を共有する。
- (3) 国際的な共創：ネグロス島 OISCA バゴ・トレーニングセンターで生産者と共同制作を行い、梅染めと現地

の草木染めの融合、色合わせの共同実験、新商品の開発に取り組む。

(4) 地域への還元と情報発信：展示会、各種報告会、新聞やラジオでの紹介などを通して海外での実践を地域に還元し、学びを広く発信する。

これらの取り組みは、地域文化の学習から海外での共創、そして地域への還元へと連続しており、学生はその中心に立ちながら実践を積み重ねてきた。以下では、この往還的な学びが地域社会と海外コミュニティでどのように展開し、どのような関係性の広がりを生み出してきたのかを検討する。

3.2 地域における協働生成のプロセス

3.2.1 地域文化との出会いと創造的展開

フェアトレード商品の開発を模索していた学生たちにとって、水戸ユネスコ協会前会長・林和男氏との出会いは大きな転機となった。林氏が主催する梅染め研修会に参加したことを機に、学生たちは梅染めの技法と文化的背景を学び、地域文化を国際協働に生かす可能性を見だし始めた。さらに、同研修会では偶然、大学 OB で組紐職人の鈴木康夫氏にも出会い、組紐に込められた文化的意味や魅力を知る機会を得る。その後、林氏と鈴木氏の指導を受けながら、学生たちは梅の木を砕いて染液をとり、絹糸を染め、丸台で糸を組む工程を一から学び、お二人の「地域文化を守り育てたい」という思いに触れて、技と文化の奥深さを実感していった。

こうした学びの重なりから、水戸の梅染めとネグロスの草木染めを組み合わせた組紐商品という発想が学生たちの中から生まれてくる。とりわけ、日本とフィリピンで質感も太さも異なる絹糸を組み合わせようという試みは、専門家からも「学生ならではの柔軟な発想」と高く評価された。試行錯誤を重ねるなかで、素材を結び合わせる営みそのものが協働のプロセスであることに気づいた学生も少なくない。学生の一人が「組紐に込められている意味や梅染めの素晴らしさを知り、『組紐』と『梅染め』と『絹』を組み合わせたフェアトレード商品に可能性を感じました」と記したように、地域にある技法や素材の文化的意味を理解して、新たな形へと結び直す営みは、学生自身の協働観を育てる契機となった。

このような創造的着想は、梅と竹を組み合わせた試作品づくりにも表れた。偕楽園を訪れた学生は、竹林のつくり出す涼やかな景観に心を留め、梅染めと竹染めを重ねる発想に至った。林氏・鈴木氏に相談したところ、偕楽園では梅を「陽」、竹を「陰」として対比的に配置し、両者の調和を図る美意識が込められていることを学

んだ。学生たちは、こうした象徴的理念と組紐の「結ぶ」という意味に触れ、文化素材を重ねる営みが、人と人、地域と地域を結ぶ媒介として働くことを実感していく。地域文化との出会いから生まれた着想と試作品づくりは、国際協働へ向かう感性を育て、本プロジェクトの創造性を支える土台となった。

3.2.2 地域の支援と関係形成

学生たちの活動は、当初は水戸ユネスコ協会の支援のもとで始まった。梅染めには火気が必要であり、同協会の計らいで国際交流会館の調理室を使用できたことは活動の立ち上げを大きく後押しした。その後、シニアボランティア団体「木もれ陽」の皆さんとの梅染め体験を通じて、代表の池田寿美子氏がアトリエと駐車場を提供してくださり、作業場所が安定的に確保されるようになる。このように地域の支援は、「初期の協力」から「継続的な伴走」へと発展していった。

学生たちは、「水戸まちなかフェスティバル」などの地域の市民イベントに出展し、作品を介して多くの市民と対話を重ねた。「若い世代が梅染めを復活させようとしているなんて嬉しいね」「元気がもらえて応援したくなる」といった声が寄せられ、学生の実践は小さな共感を呼び、地域のなかでも受け止められていく。学生からも「熱心に聴いていただき嬉しかった」「組紐の楽しさを伝えられたと思う」との声があがり、市民イベントは作品の展示販売にとどまらず、活動の意義を自覚する場として機能していた。

このような理解や共感の広がり、市民の声や支援が学生の活動に方向性や気づきを与え、次の実践へと踏み出す学びの循環を生み出していた。学生は寄せられた意見や反応を振り返り、色やデザインの工夫、説明の仕方などを改善しながら制作に取り組んでいった。一方で地域は、そうした学生の挑戦を見守り、必要な支援を惜しまず続けてくれた。学生の学びと地域の応答が往還するこの関係性は、活動を単なる技法の継承にとどめず、「地域文化を共に育てていく」協働の基盤へと深化していく。結果として、プロジェクトは地域文化に根ざした学びの場として持続的に発展していった。

3.2.3 多主体協働と海外への接続

梅染め・組紐という地域文化を媒介に、協働の輪は学内外へ広がっていった。学内では、先輩が後輩の手元を見守りながら技法を教え、留学生や初心者もワークショップに参加するようになった。学外でも、地域の高校生や中学生、シニアボランティアなど、多様な人び

とと交流する機会が増えていく。参加者は学生に「ここはどうするの?」と自然に声をかけ、そうしたやり取りの積み重ねが、年齢や立場の異なる人びとの間に小さな協働を生み出していった。「楽しんでくれてやりがいがあった」「自分も文化を伝える側になれた気がした」と語る学生の声は、その実感をよく示している。

多様な人びとと制作を共にするなかで、学生は自分が選んだ染め色や糸の組み方について、反応を確かめながら言葉にするようになった。梅染めを手にとって眺めるシニアの方、組まれていく糸の動きに見入る高校生、淡い色の重なり感想を寄せる留学生など、異なる背景の人びとが一つの場に集うことで、制作の意味や背景を共有しようとする対話が自然に生まれていく。説明とやり取りが行き交うこうした場は、作業を進めるだけの場から、互いの判断を確かめ合いながら協働を形づくる場へと変わっていった。

地域で重ねてきたこれらの経験は、海外での共同制作に向かう際の確かな支えとなった。多様な主体との対話や説明を繰り返してきた学生は、初めての環境でも制作の進め方や調整の見通しをもちやすくなり、一人の学生は「地域での経験があったから、海外でも落ち着いてできた」と語っている。多主体協働で培われたやり取りの感覚は、ネグロス島の生産者との合意形成や技法のすり合わせを支える力となり、地域で育まれた協働経験は海外での共創へと自然につながり、プロジェクト全体の推進力となっていった。

3.3 国境を越えて広がる協働の場

3.3.1 異文化の現場で立ち上がる協働

地域で技法を学んだ学生たちは、毎年二月に二週間実施されるフィリピン海外研修の一員として、ネグロス島を訪れ、OISCA バゴ・トレーニングセンターの生産者と共同制作に取り組んできた。ネグロス島は、かつて砂糖産業の崩壊により深刻な飢餓に見舞われ、「飢餓の島」と呼ばれた歴史を持つ。OISCA バゴ・トレーニングセンターは、1987年の発足以来、養蚕を通じて生産者の自立を支えてきた。その長い取り組みの文脈の中に、本プロジェクトの学生の実践も位置づけられる。しかし、学生たちがその歴史の重みをはじめから自覚していたわけではなく、現地の生活や人びとの営みに触れながら、徐々にその背景を理解していった。

現地では、地域で身につけた組紐技法が、新しい素材や文化と出会いながら姿を変えていった。学生は組紐の構造や結び方を英語で説明しつつ、生産者と同じ糸に触れ、手を動かしながら制作を進めた。言語的な不安を

抱えながらも、「手を動かせば通じ合える」という感覚が次第に共有され、作業の場には自然な対話が生まれていった。生産者にとって日本の組紐は新しい技法であり、学生にとっても異文化環境で技法を伝えるのは初めてであったが、その“初めて”を互いに共有することが関係の立ち上がりにつながっていった。

制作の場では、素材の違いや色の出方が話題となり、学生と生産者が互いの文化を持ち寄りながら作品を生み出していく姿が見られた。教える／教えられるという一方向的な関係を超えて、糸を触り合いながら感覚を交換し、共に制作の方向性を探るプロセスが協働の基盤となっていく。こうした初期の協働が、年度ごとの実践の深化へとつながっていったのである。

3.3.2 共同制作の深化と相互創造性

ネグロス島での共同制作は年度を重ねるごとに新たな展開を見せ、学生と生産者の協働は相互創造的な関係へと深まっていった。第一期生は組紐技法を初めて現地に伝え、生産者は未知の技法に強い関心を示した。学生が日本から持参した「丸台（組紐を編み上げるための道具）」を見て、生産者が滞在中に2台を手づくりしたことは、その技法を自らの手で再現しようとする姿勢を象徴している。また学生は梅染めの糸と梅・竹の色見本を紹介し、生産者と一しょに梅染めに合う草木染めとしてパパイヤと桑を選定した。帰国後に、梅とパパイヤ、梅と桑の葉を合わせて組紐プレスレット制作し、市民イベントで展示販売した。そこで得られた市民の反応は、第二期生へと引き継がれていく。

第二期生は、一期生が制作したプレスレットの作り方と市民イベントでの反応を生産者に伝え、改善点や色の選択について共に検討した。特に、組紐と組紐を結び合わせる「**True Lover's Knot**（恋人結び）」の構想について現地で意見を交わし、その可能性を探った点は重要である。帰国後、学生たちはこの構想をもとに新商品の制作を試み、市民イベントで展示販売している。国内での試作と海外での協働が往還するこのプロセスは、学生が三年生で現地を訪れ、四年生で商品化して成果を示し、その結果が次年度の学生へ継承されていくという循環を生み出していた。

第三期生は、梅染に加えて、日本で染めた4種類の絹糸（竹、藍、マリーゴールド、キバナコスモス）を携え、それに合う草木染めを生産者と共に5種類選定した。現地で生産者が染めた糸を使って、学生が組紐を編み、出来上がった紐を並べながら色の組み合わせを検討する時間は、双方の美意識や価値判断が交わる対話の場となっ

た。25通りの配色を試していく色の実験は、互いの感性を映し合う協働へと開かれていく契機となった。

このように、各期の活動は技法の橋渡しから共同設計、そして相互創造性へと発展し、学生と生産者は素材と技法を持ち寄りながら制作の意味を共有していった。地域で培った技法が異文化の場で問い直され、新たな価値として展開していく経験は、学生にとって大きな学びとなり、生産者にとっても制作の視野を広げる機会となっている。こうした制作過程の双方向的な深化こそが、次節で述べる協働の拡張と持続性の基盤となっていく。

3.3.3 協働の拡張と持続可能性の萌芽

共同制作を重ねるなかで、生産者は自分たちの糸が持つ新しい可能性に気づき始めた。ネグロスの生産者は、蚕の飼育から製糸、機織り、商品づくりまでを一貫して担うフィリピン唯一の養蚕拠点として、自らの技術に誇りを持っている。その一方で、日本市場を意識すると、「日本の絹製品に比べると品質が劣る」という課題も感じており、新しい展開を模索していた。そうしたなか、第一期生が制作した「日本の絹糸とネグロスの絹糸を合わせて組紐にしたプレスレット」が日本で高く評価されたことは、生産者にとって自分たちの糸が持つ別の可能性に気づくきっかけとなった。異なる文化圏の素材が結び合わされ日本の利用者に受け入れられた経験は、次の制作への意欲を確かに押し上げていった。

第二期生は、生産者の依頼を受けて第一期生デザインに必要な金具**100**セットを持参し、現地での制作体制を整えた。これによって生産者は、現地の糸だけを用いて1期生デザインのプレスレットを継続的に制作・販売できるようになった。学生から伝えられた技法が「借りもの」ではなく、自らの手で再構成し活かせる制作資源へと変わりつつある点に、協働の拡張が表れている。

第三期生は、新たに**True Lover's Knot**の金具を持参し、現地で制作された一期生デザインのプレスレットと対面した。生産者の手によって形づくられたその作品は、日本よりもカラフルで力強い印象をもち、地域の文化や感性が反映されていた。学生たちは、自分たちが先輩から受け継いだ活動が確かに現地で息づき、制作物として市場に並んでいる様子に深い感慨を抱いた。現地で生まれたプレスレットを学生自身が購入し、一部を日本の市民に紹介した取り組みは、制作物が日本とフィリピンの双方を行き来する循環の萌芽を示している。

以上のように、本プロジェクトにおける国際的な共同制作は、各期において技法の受け渡しや共同設計、商品化の形を変えながら展開されてきた。その特徴を表1に

整理する。

3.4 地域への還元と循環するつながり

3.4.1 地域での発信と共有の場の形成

ネグロス島での共創で得られた経験や制作物は、帰国後、地域社会に向けた発信を通して新たな広がりを見せてきた。学生たちがとくに大切にしてきたのは、現地生産者の「思い」を市民に届けることである。「ネグロスの商品は最高の愛でつくられています」「私たちの商品を手にとって、ぜひ私たちを応援してください」という生産者からのメッセージは、学生に強い印象を残し、自らの声でそれを伝えたいという姿勢を育てた。

水戸まちなかフェスティバルでは、学生が梅染め・組紐の商品やネグロスの絹製品を展示し、生産者が選んだ色や制作に込めた思いを紹介した。25色の色合わせでは、生産者が選んだ組み合わせと生産者の名前を紹介しながら、現地で交わされた対話の内容を市民に共有した。また学生は、絹の生産現場を見学して働く人びとにインタビューを行い、その記録を動画として編集し来場者に届けた。制作物だけでなく、その背後にある協働のプロセスや“人の物語”を可視化することで、市民が国際協働を身近に感じる契機を生み出していた。

こうした発信の経験を通して、学生たちは自らの役割

を新たに捉えるようになる。「フェアトレード商品の背景にはたくさんの方がいる」「商品ができあがるまでに多くの努力と苦労があることを伝えたい」という声が生徒から自然に生まれた。生産者が見せてくれた笑顔や絹づくりに込められた誇り、手仕事の丁寧さに触れた経験は、学生の語りに深い実感をもたらした。学生たちは「ネグロスの絹製品の魅力や、そこに込められた思いを届けたい」「生産者のあの笑顔を地域にも知ってほしい」と願い、伝えることそのものが活動を支える重要な原動力となっていくた。

このように、地域での展示発信は、共創の成果を伝えるだけでなく、学生が協働の“語り手”として成長し、生産者の思いと市民の理解をつなぐ媒介者となる場であった。地域と海外の間を往還する実践は、単なる報告にとどまらず、人と人の関係を結び直す営みとして機能し、プロジェクト全体を支える重要な基盤となっている。

3.4.2 市民の受容と社会的意義の可視化

地域での展示活動や対話を通して得られた市民の反応は、本プロジェクトが地域社会でどのように受け止められてきたのかを示す重要な手がかりとなった。水戸まちなかフェスティバルでは、学生の説明に耳を傾け、制作物の背景に関心を寄せる来場者の姿が見られた。2025年

表1 梅染め・組紐プロジェクトにおける共同制作の発展（第一期～第三期）

期（年度）	主な準備内容（日本）	現地での実践（ネグロス島）	帰国後の実践（日本）
第一期 (2022)	<ul style="list-style-type: none"> ・組紐・梅染め技法を習得 ・梅&竹の色見本を作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・組紐技法を初めて伝達し、生産者は強い関心を示す ・丸台を生産者が自作（2台） ・梅染めを現地に紹介し、梅に合う草木染めとして、パパイアと桑を選定 	<ul style="list-style-type: none"> ・組紐プレスレットを制作し、市民イベントで展示販売 ・市民の反応を収集し、次年度へ継承
第二期 (2023)	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の評価を整理 ・組紐と組紐を結び合わせ True Lover's Knot の 構想を検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・一期生デザイン組紐プレスレットの制作方法を伝達 ・一期生デザインへの市民の評価を共有 ・True Lover's Knot の構想を生産者と議論 ・現地制作に必要な金具（一期生デザイン）を持参し、共同制作の体制を整える 	<ul style="list-style-type: none"> ・True Lover's Knot を制作し、展示販売 ・市民の反応を収集し、次年度へ継承
第三期 (2024)	<ul style="list-style-type: none"> ・5種の日本染色色（梅・竹・藍・マリーゴールド・キバナコスモス）を準備 ・True Lover's Knot の色の組み合わせを増やし、消費者の選択肢を広げる 	<ul style="list-style-type: none"> ・生産者と現地の草木染め5種を選定 ・生産者が染めた糸で、学生が組紐制作 ・25通りの色の組み合わせを共同検討 ・生産者が制作した組紐プレスレット（一期生デザイン）を確認し、継承の意味を実感 ・現地制作に必要な金具（True Lover's Knot）を持参し、共同制作の体制を整える 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地制作の一期生プレスレットを購入し日本でも紹介 ・色のバリエーションを増やした True Lover's Knot を制作し、展示販売 ・市民の反応を収集し、次年度へ継承

度のアンケートでは、「フェアトレード商品の購入が国境を越えたパートナーシップに貢献すると思うか」という問いに97%が肯定し、展示を通して国際協力が自分たちの生活と結びつく感覚が広がっていたことが読み取れる。

商品の評価にも市民の理解がよく表れている。梅染めとネグロスの草木染めを組み合わせた組紐商品について「魅力が高まった」と答えた人は98%に上り、学生の発想による文化融合が価値として受け入れられていた。また「梅染めの魅力を感じたか」という問いでは100%が肯定し、地域文化が海外の素材との出会いを通して再認識されていた。色のバリエーションについても97%が肯定し、生産者の「色の幅が広がれば若い世代にも届く」という声とも重なる結果となった。

会場には生産者に宛てたメッセージも寄せられた。「とても綺麗で良い商品でした」「これからも頑張ってください」「人と人をむすぶコンセプトが素敵でした」といった言葉は、制作物が文化や手仕事を介して人を結ぶ存在として受け止められていることを示している。学生はこうした声に触れ、「国際協力が身近に感じられたと言われて、自分たちの活動の社会的意義が見えた」と述べている。来場者が商品を手に取りながら生産者の背景に思いを寄せる姿は、展示が地域と海外をむすぶ契機となっていた。

このように、市民の受け止めには、制作物を介して地域と海外が結びつき、協働の意味が生活の延長線上で理解されていく過程が見て取れる。来場者との対話やアンケートを通じて得られた反応は、活動が地域でどのように受け止められているのかを知るデータとなり、次年度の改善や協働の方向性を検討する際にも活用されている。こうした理解の積み重ねが、地域と世界を往還する実践を支える土台になっている。

なお、本研究では、「往還」と「循環」を明確に区別して捉えており、その違いと具体像を表2に整理した。次節に進む前に参照されたい。

表2 循環と往還の概念整理

観 点	循 環	往 還
基本的な意味	同一の活動や実践が繰り返されることで生じる	異なる場所や文脈を行き来することで生じる
強調される学び	反復と蓄積による継続性や発展性	空間的な移動を通じた経験や意味の再解釈
学生の役割	活動を継続し改善を積み重ねる担い手	学びや経験の意味を更新し再構成する担い手
本研究の焦点	地域と海外をつなぐ学びが次年度の活動に反映され、実践が発展していくプロセス	地域での学びが海外で再解釈され、その成果が再び地域の戻るプロセス

※本研究では、第一期～第三期を通じた実践の継続を「循環」、各期における地域と海外の行き来を「往還」として整理している。

3.4.3 往還が育む循環と学生の役割の深化

地域への還元によって生まれたつながりは、次年度の活動へと確かに受け継がれている。市民イベントで寄せられた意見や展示会での反応は翌年の制作や改良に生かされ、学生はそれらを英語でまとめて生産者に伝えてきた。ローカルとグローバルを行き来するこうした往還の積み重ねが、「地域で得た気づきが海外の制作に生かされ、現地で生まれた成果が再び地域へ戻る」という循環を形づくり、プロジェクトに継続性を与えていた。第二期・第三期に導入された金具の改善や色展開の工夫も、地域の声と現地での経験が響き合うなかで磨かれてきた成果である。

この往還の循環は、学生の役割意識にも変化をもたらしている。⁸市民に協働の背景を説明する経験を重ねるなかで、学生は自らの位置づけを「制作に参加する人」から、「協働の意味を社会に伝える担い手」へと広げていった。次期代表の学生が「ものを届けるだけでなく、そこに込められた思いや背景を伝えることに意味がある」と語ったように、海外での共創の体験を自分の言葉で語り直すことは、学生が協働の主体として成長するプロセスになっていた。生産者の語りや現地での学びを自らの経験として語ることは、協働の意味を改めて捉え直す契機でもあった。

このように、海外での共創と地域での発信が往還する過程の中で、プロジェクトは「関係が更新され続ける協働」へと深まってきた。地域で始まった学びが海外で変容し、その成果が地域へ戻るという循環は、教育実践の広がりを支え、地域社会が国際協働の主体として関わる基盤を形づくっている。

4. 分析—地域と世界をむすぶパートナーシップの特徴

4.1 地域におけるパートナーシップの形成：出会いを紡ぐ学生の役割

梅染め・組紐プロジェクトの初期段階では、学生が地域に身を置かなかで生まれた「偶発的な出会い」が、協働の立ち上がりを導いていた。張本（2025）が述べるように、大学と地域の連携は制度的枠組みや協定によってのみ成立するのではなく、現場での偶然の接点に関係形成の契機となる場合がある。本プロジェクトにおいても、梅染め講習会での林氏との出会い、組紐職人の鈴木氏との再会、シニアボランティア団体「木もれ陽」の協力といった予期せぬ出来事が、学生の学びを押し広げ、地域文化への新しい接続点をつくり出していた。学生が、これらの偶発性に感謝し、積極的に受け止め、次の行動へとつなげた点に、協働の“生成”の特徴が見いだされる。

協働の立ち上がりが偶発的であった一方で、活動が継続し形を伴い始めるためには、学生が「媒介的な働き」を担うことが重要であった。金子（2016）や兒玉・隅野（2018）が指摘するように、大学やコーディネーターは地域社会内の多様な主体を接続するハブとしての媒介機能を持つが、本プロジェクトではこの役割が学生個人にまで拡張していた。学生は地域で学んだ技法を市民や高校生に伝え、体験活動を案内し、他団体との橋渡しを行うことで、地域内の関係性を編み直していた。こうした実践は、媒介機能が組織レベルのみならず、学生の具体的な行為を通じて発現することを示しており、協働の“深化”が個人の実践を軸としても進展することを物語っている。

さらに、活動が広がりを見せる過程では、梅染めや組紐といった「文化の媒介性」が、地域社会における協働の基盤として働いていた。UNESCO（2019）やSakamoto（2017）が述べるように、文化は地域アイデンティティを支えるだけでなく、他者との接点をつくる媒介資源である。本プロジェクトでも、梅染め・組紐は技法の学習や市民イベント、学校間交流といったさまざまな場面で異なる主体を結びつけ、地域文化への関心を呼び起こしていた。学生は文化技法を学ぶ“受け手”であると同時に、他者へ伝え直し、新たなかたちで表現する“語り手”として文化を媒介し、協働の“拡張”を担っていた。

以上のように、地域での協働は偶発的な出会いから生成し、学生の媒介的な実践を通して関係が深化し、地域文化を軸に新たな主体を巻き込みながら拡張していった。こうしたプロセスの中で、学生は単なる活動参加者ではなく、地域における協働基盤を立ち上げ、他者との関係の糸を編み直す存在として機能していた。第2章2.3で整理した三つの視座は、本プロジェクトの地域フェーズを的確に説明し、大学生が地域の中で多様な関係を紡

ぎ出す担い手となる可能性を浮き彫りにしている。

4.2 国境を越えたパートナーシップ：共創の担い手としての学生の役割

ネグロス島での共同制作は、学生が地域で培った技法を携えて現地に入り、生産者と共に制作に取り組むという形で立ち上がった。本節では、第2章2.2で整理した四つの観点——「協働性」、「互恵性」、「ホスト起点」、「多主体性」——から、本プロジェクトにおける国際協働の特質を検討する。

まず、協働性の観点からは、共同制作そのものが学びと関係形成の基盤となっていた点が特徴的である。学生は組紐の構造や結び方を英語で説明しながら生産者と並んで糸を扱い、素材の特性や色の見え方を語り合い、共同で制作を進めていた。技法を共有しながら手を動かすという身体性を伴う協働は、知識や技術の伝達にとどまらず、制作を支える判断や感性を相互に理解する機会を生み出していた。こうした“共につくる”経験が、国際協働を支える関係性を形づくっていた。

次に、互恵性の視点から見ると、制作過程には双方の学びが生じる双方向性が認められた。学生は生産者が日常的に用いる素材や染色の工夫から新たな知見を得ていた一方、生産者は学生が提示した梅染めや組紐のアイデアに触れることで制作の幅を広げていた。第二期の「True Lover's Knot」をめぐる議論や、第三期の色展開を検討する場面では、互いの発想や判断が影響し合い、制作を通じて双方の思考や技術が更新されていた。この相互作用こそが、国際協働学習における互恵的な学びの具体像である。

さらに、ホスト起点の観点からは、協働の出発点がネグロス島側に置かれていた点が重要である。生産者からの「日本でも手に取ってもらえる商品をつくりたい」という願いが活動の出発点となり、学生の制作はこの願いに応える形で展開された。送り手側の都合で活動を設計するのではなく、現地側のニーズと文化的文脈に寄り添って協働が組み立てられていた点で、倫理的にも対等なパートナーシップが形成されていたといえる。

最後に、多主体性の観点から見ると、本プロジェクトの国際協働は、学生と生産者という二者関係にとどまらず、大学、地域住民、同窓会、OISCA、市民、消費者など、多様な主体が緩やかに関与するネットワークの中で展開されていた。市民イベントで寄せられた声が翌年の制作に生かされ、現地の改善が日本での実践へと反映される往還の流れは、国際協働が多主体的な関係性の中で更新されていくプロセスを明確に示している。

以上のように、本プロジェクトにおける国際協働は、協働性を基盤に関係が生成し、互恵的な学びによって深化し、ホスト起点の視点を取り込みながら展開し、多主体的なネットワークの広がりへとつながっていた。その中心には、梅染め・組紐という文化を携えて現地に入り、現地の生産者と共に、新しい作品をつくり上げていく学生の姿があった。学生は、まさに、国境を越えた“共創の担い手”としてその役割を果たしていたのである。

4.3 地域と世界を往還するパートナーシップ：グローバルな学びの展開

梅染め・組紐プロジェクトは、学生が地域で文化技法を学び、その学びを携えて海外で共創に取り組み、さらに地域へと還元する往還的な実践として展開されてきた。本節では、この実践を **SDGs17**、地球市民教育、および **Lim (2024)** の議論に照らして検討し、大学教育におけるグローバルな学びの意義を明らかにする。⁹

まず、**SDGs17** が求める「パートナーシップ」の理念は、多様な主体が国境を越えて結び合う協働を強調している。学生は、地域の講師・職人・市民とのつながりの上に立ち、その協働関係をネグロス島へと持ち込み、生産者との共創へと広がっていた。地域で形成された小さなパートナーシップが、学生を介して国際協働へ結び直されていく点に、本プロジェクトが **SDGs17** の理念と響き合う特徴が見られる。

一方、地球市民教育が強調する「地域・国家・世界という多層的レベルで責任ある行動を取る」という視点からは、本プロジェクトの往還型学習が、ローカルとグローバルを行き来しながら文化を理解し、他者と協働する態度を身につける場となっていたことが確認できる。学生は、自文化を携えて異文化の場に入り込み、生産者との制作過程で文化的価値観の違いに向き合い、対話を通して相互理解を深めていった。こうした経験は、地球市民教育が示す「ローカルとグローバルを往還する学び」を具現化するものであった。

さらに、**Lim (2024)** が示す「大学の国際関与を公共的使命として捉え直すべき」という議論に照らせば、本プロジェクトは地域と海外の課題の両方に学生が関わり、協働を通して公共的価値を生み出していく実践として位置づけられる。学生は地域文化を手がかりに海外で価値創造に参画し、その成果を地域へ返す往還的な取り組みを通じて、「地域社会と国際社会の双方に応答する」という姿勢を獲得していた。

以上の点から、本プロジェクトは、文化を媒介として地域と世界を往還しながら協働を創出する経験を通じ

て、学生が多様な人々とパートナーシップを形成する力を育み、地球市民としての資質を身につける場となっていたと言える。これは、グローバルな視野と身近な地域で実践する力を育む事例であると共に、大学教育におけるグローバルな学びの可能性を示唆するものである。

5. まとめと今後の課題

5.1 大学の地域連携における課題

本プロジェクトの歩みをふり返ると、地域との連携は制度的枠組みからではなく、学生の自発的な行動から立ち上がっていたことが分かる。学生が梅染め講習会に自主的に参加したことが林氏や鈴木氏との出会いを生み、その関係が地域文化を媒介とした学びへと展開した。学生の興味や動機に支えられたこうした行動は、地域連携の起点として大きな意味を持っている。

特に、地域での活動は「偶発的な出会い」によって広がりを見せていた。梅染め研修会での対話、梅染めと組紐を介した高校生や中学生との交流、シニアボランティア団体「木もれ陽」みなさんとの協働、市民イベントでの市民の反応など、現場で生じる予期せぬ関係が次の実践を自然に生み出していた。大学が設計していない“偶発の接点”が学びと協働の契機となっていた点は、地域連携における重要な示唆である。

また、学生が技法を学びながら試行錯誤する「未完性」の特徴は、地域の人々の関与を引き寄せる力になっていた。学生の姿に対して、「応援したい」「一緒につくりたい」という声が自然に寄せられ、地域の人々が協働の輪に加わっていった。これは、学生が単なる学習者にとどまらず、関係を立ち上げる主体であることを示している。

一方で、これまでの実践をふり返ると、学生の入れ替わりや情報の偏りによって活動が継続しにくくなるという課題も見えてきた。地域には多様な学びの場が存在するが、それらがすべての学生に開かれているわけではなく、特定の教員や学生に依存しやすい。本プロジェクトの経験は、自発性や偶発性が価値を生む一方で、大学として学びの機会へのアクセスを広げる仕組みづくりが今後の課題であることを示している。

5.2 地域から大学への要望

本プロジェクトでは、地域の担い手たちが学生との協働に強い価値を見出していた。学生が組紐を高校生に教える場面や、木もれ陽のメンバーと一緒に梅染めを行う姿、留学生との国際交流は、地域にも大学にも新しい活力を呼び込むものであった。地域にとって、学生は文化継承のパートナーであり、活動に新たな視点をもたらす

存在として受け止められていたのである。

地域が求めているのは、学生が継続的に関わることができる学びのしくみである。ただしそれは制度化された枠組みではなく、学生が興味や動機に応じて自由に参加できる「開かれた学びの場」の整備である。木もれ陽のアトリエ提供や、同窓会の支援は、学生が地域の実践に自然にアクセスできる支えとなっていた。

また、本プロジェクトをふり返ると、例えば地域には文化講習会、市民イベント、学校間交流など多様な学びの場が存在するにもかかわらず、それらの情報が大学内で十分共有されていない状況が見えてくる。地域の担い手は、大学が情報を整理し、学生が学びたいときに適切な場へ接続できる体制を望んでいる。この意味で、地域連携センターや学部間の教員ネットワークの役割は小さくない。

さらに、学生同士が学びや経験を共有し合う場が継続的に確保されれば、地域との協働はより豊かに広がる。先輩学生の技法や活動が後輩へ自然に継承され、学びの循環が生まれることは、地域の文化継承にも資する。大学がこうした学びの場を提供することに対して、地域は大きな期待を寄せている。

5.3 大学への提言

本研究の実践と地域からの声を踏まえると、大学への提言は次の三点に整理される。

第一に、学生が地域の学びの場へ自由にアクセスできる環境を整備することである。

大学は新たな制度を構築するのではなく、地域文化講習会やワークショップ、市民活動の情報を学生に開き、安心して参加できる状況を整える必要がある。共有カレンダーの活用や地域活動マップの整備は、学生の視認性を高めるしくみとして、自発的な参加を支える具体的な手立てとなる。

第二に、学生の学びを学内で循環させる仕組みを構築することである。

経験が点に終わらず、次年度へと循環していくように、ゼミ横断の活動報告会や、ワークショップ、学内展示など、学生同士が互いの学びの経験を交換できる場が継続的に保証されることは、新しい協働を生み出す土壌となる。

第三に、学生・教員・地域の実践が互いに見える環境を整えることである。

多主体が関係性を更新し続けるためには、互いの実践が「見える化」されている必要がある。大学の地域連携センターを基軸にして、大学が率先して、地域の学びの

機会や文化的ニーズを集約し、学生が「何を学びたいか」に応じて地域と教員へスムーズに接続できる体制を構築することが求められる。

なお、著者の勤務校である常磐大学では、2026年度から「グローバル教育」カリキュラムが導入される。その概要を表3に示した。この新しいカリキュラムは、本研究が示した「自発性」「偶発性」「互恵性」「文化の媒介性」を制度として支える可能性を持っている。しかし、これらの価値観が大学内でどこまで共有され、実際の教育実践に落とし込まれていくかは、今後の検討課題であり、引き続き見守っていく必要がある。いずれにせよ、本研究で示した三つの提言は、グローバル教育が地域と世界を結ぶ学びを具体化していく際の重要な方向性を示すものである。

5.4 結語

本プロジェクトは、地域文化と国際的な共創を往還する学生の姿を通して、大学が地域と世界の双方にどのように関わりうるのかを示す実践であった。地域での学びが海外での共同制作へとつながり、現地で得た経験が再び地域に還元されていく一連のプロセスは、学生が文化を媒介に多様な主体と関係を結び直し、協働の担い手として成長していく軌跡を明らかにした。

こうした往還型の学びは、地域社会と国際社会の双方を視野に入れて行動する態度を育むものであり、多くの大学がめざすグローバルな教育の方向性とも響き合う。学生の自発的な関わりや偶発的な出会いが協働を生む契機となり、文化を媒介とした共創が新しい価値を生み出していくプロセスは、大学が今後、地域と世界を結ぶ学びの場としての役割を強化していく際の重要な示唆となるだろう。本研究が、地域と世界のパートナーシップ構築に向けたささやかな手がかりとなれば幸いである。

利益相反

本研究は、著者が所属する大学および地域団体との教育・研究活動の一環として実施されたものであり、開示すべき利益相反関係はない。

謝辞

本研究および実践を進めるにあたり、多くのご支援とご協力をいただいた水戸ユネスコ協会前会長の林和男氏、常磐大学OBで組紐職人の鈴木康夫氏、ならびに作業場を提供していただくなど活動をサポートしてくださった「木もれ陽」代表の池田寿美子氏に、心より感謝申し上げます。

表3 常磐大学のグローバル教育（2026年度開講）

<p>○目的：グローバルな視野と海外経験をもち、協働を通して地域課題の解決に寄与できる人材の育成</p> <p>○プログラム構造</p> <p>〈基幹科目〉「グローバル化における地域社会」（必修2単位）</p> <p>〈グローバル科目群〉（選択12単位）「地域文化研究」「地域社会研究」「プロジェクト」他</p> <p>〈海外学修〉（必修2単位）「海外研修」「交換／協定／認定留学」他</p> <p>○本研究との関連：著者は「プロジェクト（地域実践）」と「海外研修」の講義を担当</p>

また、フィリピンでの実践において継続的なご支援をいただいたオイスカ茨城の小野瀬康武氏、OISCA バゴトレニングセンターの皆様、および常磐大学国際交流語学センターの関係各位に、深く御礼申し上げます。

そして何よりも、本研究で扱った協働のプロセスを、日々の実践のなかで一つひとつ形にしてくれた学生諸君に、深く感謝します。

注

1 国連決議書の正式タイトルは、“Transforming our world: The 2030 Agenda for Sustainable Development” (United Nations, 2015)。SDGs は、2015年の国連総会において加盟国のすべてが賛同し採択された。

2 本研究で用いた質的データは、教育実践および研究目的で収集されたものであり、個人が特定されない形で整理・分析している。学生の卒業論文や聞き取り記録については、本人の同意を得たうえで使用している。

3 SDG17 (Partnerships for the Goals) は、持続可能な開発目標全体を支える横断的目標であり、国連の公式文書では「Global Partnership for Sustainable Development」という表現が用いられている。これは、各国政府、国際機関、民間部門、市民社会など、多様な主体による国境を越えた協働の重要性を示すものである (United Nations, 2015)。

4 SOFAR モデルは、Students (学生), Organizations (大学・受入団体), Faculty (教員), Administrators (運営・事務担当者), Residents (地域住民) という五つの主体が相互に関係しながら国際サービス・ラーニング等の実践が展開される過程を捉えるための分析枠組みである。

5 フィリピン海外研修の概要および実施内容については、常磐大学国際交流センターが公開している『フィリピン海外研修報告書 (2024年度)』を参照されたい。
<https://www.tokiwa.ac.jp/international/short/philippines-report/>

6 フィリピン海外研修では、梅染め・組紐プロジェクトの他にも、複数のSDGsプロジェクトが実践されてきた。これらの活動については、水戸市役所のHPで公開されている講演動画でも紹介されている。水戸市 (2024)

『SDGs 講演会 (常磐大学 小関一也)』 [動画] <https://www.city.mito.lg.jp/page/88006.html>

7 水戸ユネスコ協会の林和男氏を中心とした梅染めの取り組みについては、地域文化の継承と市民参加の実践として記録された現地レポートが公開されている。同レポートでは、梅染めの講習や制作活動に加え、市民や学生、地域団体に関わる協働の様子が紹介されている。
<https://chiikino.com/report/shirouto-vol16/>

8 本研究において「往還」とは、異なる文脈を行き来するなかで実践の意味が更新されるプロセスを指す。また「往還的循環」とは、そうした意味の更新が次の実践へ引き継がれながら繰り返されていく構造を示す。

9 日本の高次教育においては、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)」が、地域課題と国際的視野を往還する探究学習を制度的に支援している。本研究が扱う大学段階のグローバル教育の方向性は、こうした全国的教育動向とも一定の連続性を持つ (文部科学省, 2019)。

参考文献

【英文文献】

- Chan, C., Ngai, G., Yau, M., & Kwan, R. (2021). Impact of international service-learning on students' global citizenship and intercultural effectiveness development. *International Journal of Research on Service-Learning and Community Engagement*, 9(1), 1–17.
- Gregory, M. R., Schroeder, E. E., & Wood, S. (2021). A paradigm shift in international service-learning: The imperative for reciprocal learning. *Sustainability*, 13(8), 4473.
- Lim, M. A. (2024). Internationalisation and the Sustainable Development Goals (SDGs) in higher education: The promise of internationalism and the danger of positionalism. *Journal of Higher Education Policy and Leadership Studies*, 5(2), 22–34.
- O' Sullivan, M., & Smaller, H. (2023). *Decolonizing*

- international service learning: Pre- and post-COVID perspectives*. Brill.
- Sakamoto, T. (2017). Community-based cultural exchange in higher education. *Journal of International Education Research*, 13(2), 77–88.
- UNESCO. (2015). *Global citizenship education: Topics and learning objectives*. UNESCO Publishing.
- UNESCO. (2019). *Culture 2030 indicators*. UNESCO Publishing.
- United Nations. (2015). *Transforming our world: The 2030 Agenda for Sustainable Development*.
- 【和文文献】
- 倉田和四生 (2018) 「大学と地域の協働における関係性構築の視点」『大学と地域連携研究』, 5, 23–34.
- 金子元久 (2016) 「大学の社会的責任 (USR) と地域連携の課題」『大学改革論集』, 12, 45–59.
- 兒玉幸子・隅野美砂輝 (2018) 「大学と地域社会をつなぐコーディネーターの役割」『大学と地域連携研究』, 4, 67–78.
- 清水睦美 (2016) 「地域連携活動における偶発性の意義：学生参加型市民活動の分析」『地域政策研究』, 19(2), 101–113.
- 佐藤学 (2014) 「学びの生成としての偶発性」『教育学研究』, 81(3), 257–268.
- 藤山一郎・大山牧子 (2024) 「『参加型開発論』からみた SOFAR モデルの検討—インドネシアにおける海外サービス・ラーニングを事例に—」『ボランティア学研究』, 24, 19–30.
- 張本文昭 (2025) 「偶発から産まれる大学と地域の連携」『大学地域連携学研究』, 4, 76–82.
- 村田晶子 (2017) 「国際ボランティアプログラムにおける互惠性と学生間の学び合い」『ボランティア学研究』, 17, 55–66.
- 文部科学省 (2019) 『地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)』 文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1415089.htm
- 文部科学省. (2019) 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)」. 文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1415089.htm
- 【参考資料 (梅染め・組紐プロジェクト)】
- 地域の魅力発信サイト「ちいきの」編集部 (2024). 『梅染めを通して地域と人をつなぐ—水戸ユネスコ協会の取り組み—』 地域の魅力発信サイト「ちいきの」 <https://chiikino.com/report/shirouto-vol16/>
- 常磐大学国際交流センター (2024) 『フィリピン海外研修報告書 (2024 年度)』 常磐大学 <https://www.tokiwa.ac.jp/international/short/philippines-report/>
- 水戸市 (2024) 『SDGs 講演会 (常磐大学 小関一也)』 [動画] 水戸市公式ウェブサイト <https://www.city.mito.lg.jp/page/88006.html>